

プロローグ

ぽたり。ぽたり。

障子越しに、どこからか水音が聞こえる。

ここは、夢魅庵の〈夢の離れ〉——という場所らしい。畳敷きで、空気はどこか柔らかく、白檀のような香りがほのかに鼻腔をくすぐる。

……ほんとに、来ちゃった……。

友人にこっそり紹介された場所だった。

「なんか、ヤバいくらいスツキリするっていうか……すごい。とにかく気持ちいいし、中でイケなかったのに、この人にされたら……ううん、やっぱ行ってみればわかる！」
酒の席で、これでもかと酔っ払った彼女は、冗談かと思うほど艶っぽかった。

私だって、どうにか……。

中でイケない。何をしてもダメだった。外なら反応するのに、挿れられると不安とプレッシャーで冷めてしまう。それがずっと、コンプレックスだった。

怖い気もしたけど、「あの子が勧めるなら」と、勇気を出して予約を入れた。

「はじめまして。今日は俺が担当する、ルシアンだ。よろしくな」

——一瞬、息が止まった。

黒のポロシャツにダークグレーのスラックス。ラフすぎず、でも隙のある私服のような施術着。乱れた黒髪に、やや無精髭。くつきりした目元が笑うと、少しだけ、悪い男の顔になる。

……ヤバ……。

彼女の言っていた施術師とはまるで違ったけど、声も、顔も、どストライクだった。低く、胸に響くような声音。言葉を噛み砕くような喋り方。見ているだけで、奥のほうぞくりと疼く。

タイプすぎる……いや、でも施術師だし……普通のマッサージだし……。

「脱ぎにくかったら、手え貸すけど。……大丈夫そうだな」

タオル一枚の背中に彼の掌が触れた瞬間、思わずビクリと背筋が跳ねた。熱い。けれ

ど、嫌じゃない。

「肩、ずいぶん凝ってんな。……ん、これは首から来てる。目も酷使してるだろ」
手慣れた動きで、肩を揉みほぐしながら低く言葉が落とされていく。強すぎず、でも
絶妙な力加減。こり固まった部分がゆっくりと溶けていくような、癒しの圧。

——気持ちいい。

緊張していた身体が、じわじわとベッドに沈んでいくのが分かる。

「……ふ。ちょっとずつ、身体がほぐれてきたな」

囁くような声が耳元に近づき、びくんと身体が震える。声が、妙に……いやらしい。
さっきまでと何も変わっていないはずなのに、空気が、ぬるりと変わった気がした。
ルシ안의指先が、背骨に沿って滑り降りてくる。

ぐっ……と腰の筋肉を押された瞬間、声が漏れそうになった。

「おっと……そこ、感じるのか？」

「ち、違……っ、ただのマッサージ、で……」

「へえ。じゃあ、ちゃんと確かめてやんねえとな」

低い笑い声とともに、指先がもう一度ゆっくりと撫でるように押し込まれる。さっきよりも、わざとらしく、ゆっくりと。焦らすように。

「……なあ」

ルシアンが、不意に問いかけるように言った。

「ほんとは、気持ちよくされるの、好きなんだろう？」

「……っ」

視線は交わさずとも、身体は正直だった。火照り、呼吸が浅くなる。シーツを握る手が、ほんの少しだけ震える。

「言ってみ？　ここに来た“目的”を」

彼の声が、さらに低く、甘く、鼓膜に直接落ちてくる。

「……べつに……」

言えない。恥ずかしくて。

「——“中でイケない”って、悩んでるんだろ？」

ぐさりと突き刺さるように囁かれた言葉。鼓動が跳ね、全身が一瞬で熱くなる。

「どうして、それを……」

口に出したくなかった悩みを、いとも簡単に言い当てられてしまって、視線を逸らすしかなかった。

「そういう空気が、身体から出てる。……でも安心しろ。ここに來たってことは、そういう自分に——本気で、終わりにしたいって思ってるってことだろ？」

ルシアンの手が、そっとタオルをずらし、腰骨のラインをなぞった。ぞくりと、背筋を快感が走る。呼吸が浅くなっていくのが、自分でも分かる。

「隠さなくてもいい。全部俺に任せてみないか？」

普通なら絶対に拒否する提案。でも、なぜだか、その時は拒否する気分にならなかった。

全部、この人に任せてもいいと思った。

第一章..夢の離れへようこそ

「本当に嫌ならすぐ言うんだぞ。じゃ、確認するな？」

「えっ……？」

「こっちは、感じるんだよな？」

問いかけるように、でも確信を持っている声音。躊躇う暇もなく、彼の指先が太ももを這い、マッサージ用に着替えた紙ショーツの上から、ふわりと割れ目を撫でた。

「ひ……あっ」

「ん。しつかり、反応してるじゃねえか……かわいいな」

ショーツ越しに、クリトリスのあたりを優しく押される。下腹部がじんわりと熱を持ち始め、腰が勝手に浮く。

「ほら、濡れてきてんぞ」

「ちがつ……そんなんじゃ……！」

「大丈夫。恥ずかしがんなって。気持ちよくなるのは悪いことじゃないぜ？」

耳元で、ねっとりとした声が囁く。彼の指が、ショーツの中へと潜り込むのを止めることができなかった。

ぬるんと濡れたそこを、クリトリスに向かって撫で上げる。

「あ……っ、あ、ん……っ」

「やっば、ここはちゃんと感じるんだな……ふ、いいコだ」

小さく丸く尖った粒に、指先が軽く触れた瞬間、全身が跳ねた。彼はそれを逃さず、繊細なタッチで何度も何度も、そこをなぞる。

「ほら……ほぐれてきたな。ここをちゃんと感じられるなら、『中』だって、開発できる。焦らず、ゆっくりやろうぜ？」

囁く声が、まるで催眠のように脳を蕩けさせる。

「もっと気持ちよくしてやるよ」

「ん……っ♡」

ほんのかすかな触れ方なのに、腰がぴくんと跳ねる。

ぐり、と押されるわけじゃない。ただ、優しく……小さな花の蕾をいたわるように撫でられているだけ。

でも、それが余計に——たまらなく、焦らされる。

「反応いいな。……可愛い」

ルシアンの手ひらが私の恥丘を覆い、親指だけがクリトリスに集中して、小さく、小さく円を描く。

「あつ、ああ♡ んんっ……そこお……♡」

ぬるんと濡れた自分の感覚が、彼の指先に吸い付くのがわかる。

くちゅっ……ぬちゅ……ぬるぬると愛液が絡んで、いやらしい音が室内に満ちていく。

「どんどん濡れてくるな……可愛いよ、感じてるの丸わかりだ」

「や、やだぁ……♡ 言わないで……っ♡」

「なんで？ ちゃんと反応してくれるほうが嬉しいよ。……ほら」

指が一度離れて、また戻ってくる。今度は中指と薬指が両脇からクリトリスをつまむように挟んで、小さく揉みしだく。

「っっ……あああっ♡♡♡」

ビクンツと腰が跳ねた。快感が、脊髓を通って脳にまで突き抜けるような錯覚。

「まだまだ、いけるだろ？ 中に入れる前に、こっちでイキ癖つけといてやる……」

今度は、中指一本で直接クリトリスを上下にゆっくりと撫でられ——さらにその上から、人差し指が覆いかぶさる。

二重の刺激が、やさしくも執拗に、クリを責めたててくる。

「いやっ、やばいっ……♡ またくる、くるのお……♡♡♡」

「遠慮すんな。イきたいならイけ。俺が止める理由なんて、ない」

その声が、低く甘くて、どこまでも優しく——。

「んああああ♡♡♡♡」

震える腰を抑えられながら、私はまた絶頂の波に飲み込まれた。

ぐちゃぐちゃになって、それでも指は止まらない。

クリトリスの先端を軽くつままれたり、円を描くようにねっとり撫でられたり——

そのたびに快感が止まらず、息も止まりそうになる。

「すごい、イキやすくなってるな。何度でも、イける身体にしてやる」

第二章…快感の扉をノックして

突然、指が引かれ——代わりに、ひんやりとした感触の何かが押し当てられた。

「っ、これ……？」

「吸引式の道具だ。気持ちよすぎて泣くコもいる。……試してみるか？」

問いかけられたただけなのに、身体が勝手に頷いていた。

「よし。じゃあ、遠慮なく……」

ふう、と息を吐く音とともに、小さな器具がクリに密着する。吸い上げられるような振動が走った瞬間――

「ひゃっ、あっ、だ、だめっ、そんなの……♡♡」

「本当にダメなのか？」

器具は一定のリズムで吸い上げるように震え、時折びりつとくるような強さに切り替わる。そんな振動に翻弄されながら、逃げようとする腰を片手でしっかりと押さえられる。

「あっ、ああっ……や、やばい、なにこれ……ッ♡」

「気持ちいいんだろ？ 我慢すんな」

吸引の刺激が、じわじわと快感の波を高めていく。脚の付け根が勝手に震え出し、呼吸がうまくできない。

「あっ、く、あ、ああっ、いつ、いく……っ、！」

「いいよ、ちゃんと感じて。全部見せてみる」

最高潮に達したその瞬間——吸引器のリズムが一段と強くなり、ついに弾けた。

「あ、ああああっ……♡♡♡」

太ももが震え、背中が反る。吸われながら、絶頂の波に飲み込まれていく。腰が抜けるほどの快感。ひとつ、ふたつ、余韻の波が身体を打つ。

器具が外され、ようやくクリが解放されると、熱い息が漏れた。

「よく頑張ったな……でも、ここからが本番だ」

ルシアン の指先が、やさしく頬を撫でる。

「中はな……もっと、奥のほうで感じられるんだよ」

指先が、濡れた入り口にあてがわれる。

「試してみるか？」

ぬる、と……内側に、彼の指が入ってくる。

ゆっくりと、優しく、それでいて確実に奥へ向かって這い進むような動き。

私は思わず、シーツを握りしめた。

「……………♡」

「痛みはないか？」

「……………うん、大丈夫……………♡」

そう言ってみたけれど、実際はドキドキが止まらない。

これから『中』を開発される——そんな意識だけで、呼吸が浅くなる。

でも、彼の手はあたたかくて、指の動きは丁寧で、怖さよりも安心感のほうが強かった。

「……………ここが、お前の G スポット……………どうだ？」

くちゅつ……………と、指が膣壁の内側をこすった瞬間、膝がピクリと跳ねる。

刺激が脳に直結してくるみたい、じんわりと頭の奥がしびれた。

「今、感じたか？」

「……………うん……………♡　ちよっと、変な感じ……………でも……………気持ち、いい……………♡」

「よし、じゃあ……そこを育てていこうな」

育てる、という表現に、なぜか胸がきゅんとした。

優しく、あたたかく包まれて、私の感じる部分が目を覚ましていく——そんな気がした。

ぐっ……くちゅっ……

指先で、同じ場所をリズムよくこすられるたびに、内側がじんわり熱を帯びてくる。息が少しずつ上ずって、口からもれた声を慌てて手で塞ぐ。

「我慢するな。声、ちゃんと聞かせろ。感じてるなら、恥ずかしがることはない」

「で、でも……っ♡」

「いい子だ、素直になってみろ」

その一言で、私は手を外すしかなかった。

代わりに、ルシアンの手が私の口元をそつとなぞる。

それだけで、快感と羞恥が混ざり合って、身体がぞわぞわと反応した。

彼の指が、また深く沈みこむ。

そして、ゆっくりと円を描くように、内壁を撫でまわす。

「ほら……奥の方、少し膨らんできてる。感じるようになってきた証拠だ」

「う……っ、あ……♡ な、なんか、うずく……♡」

「もつと触ってほしいか？」

「……っ♡ うん……♡ 触って……ほしい……♡」

そんな言葉、自分から言うなんて思わなかった。

でも、口から出てしまったそれに、ルシアンは静かに微笑んだ気がした。

次の瞬間——ぐ、っと。

指が第二関節まで一気に深く入り、内側のふくらみに圧がかかった。

「ひっ♡ あっ、あああっ……♡♡♡」

中が痺れるように跳ねて、腰が逃げた。

それを見越していたのか、ルシアンのもう一方の手が私の腰を押さえる。

「逃げるな。せっかく感じられるようになってきたんだから、覚えこませてやる」

くちゅ、くちゅっ――

執拗に、でも愛情を持って、内側を責め立てる指。

そのたびに、中が熱をもつて膨らみ、快感の芯が明確になっていく。

「なあ、分かるか？　ここが、お前の気持ちいい場所だ」

「し、知らなかった……♡　こんなに気持ちいいなんて……♡♡♡♡」

「まだまだ、これからだ。もっとと敏感になれる。もっと、奥でイける身体にしてやる」

それから彼は、指の数を少しずつ増やしていった。

二本、そして三本――最初は少し抵抗があったけれど、彼の指はゆっくりと馴染ませるように出し入れされ、私の身体はどんどん受け入れてしまう。

やがて――

ぐちゅっ、ぐちゅっ、ぐちゅんっ………！

「あぁっ、あぁあぁっ♡♡♡　また、くるっ……♡♡♡♡」

「イけ……覚えていけ……もつと深く、奥で感じられる身体になれ」

その瞬間、中がぶるつと震えて、ぐつと締めまり――

私は彼の名前を呼びそうになるのを、ぎりぎり堪えた。

連続で、止まらない。

いった直後の中に、さらに追撃が来て、快感の波が途切れない。

「ひゃ、あつ、や、やだ……♡ 止まんないっ……♡♡♡」

「それでいい。中で気持ちよくなるってのは、そういうことだ」

絶頂の余韻に包まれた身体に、ルシ안의指が再び触れる。

ふるえる脚の間にぬるりと挿し込まれた指は、さっきとは比べものにならないほど深く、濃密に、ねつとりと動き始めた。

「ほら、もう、こんなにトロトロになった……中が指、吸いこんでくる」

「ひゃ、っ……や、あっ……！」

奥の奥を、ぐちゅつ、ぐちゅつ、と音を立てて撫でまわす。

細くて長い指が、愛液を絡めて中でかき混ぜるたびに、下腹が跳ねた。

「このへんか……？ さっき反応よかったトコ……」

指先が、膣壁の内側——ざらついた一点をぐっと押し上げた。

ビクッと腰が跳ねる。

「あ、あつ、や♡ あつ……だ、め、そこ、なんかっ……♡」

「ん、ここがさっきも言ったGスポットって場所だ。気持ちいいところ、だろ？」

言葉に合わせて、そこをくちゆくちゆと執拗に責め立てる。

ピンポイントで撫でて、押して、回して……焦らすように、時折わざと外す。

「あああっ♡ も、そこ、ばっかり……くる、くるのおっ♡」

「イキ癖、ちゃんとつけねえとな。ここが気持ちいいって、身体に覚えさせてやる」

くちゆ、くちゆ、ぐच्चゆ、ぴちちゅ——

指先で押し潰されるような感覚に、奥から痙攣が止まらない。

「ルシアン、や、っ、ああっ♡ お腹の中、変になっちゃうっ♡」

「いい子だな。中、ちゃんと気持ちよくなってきた。ほら……もう一回、イこっか」言葉と同時に、指の腹が“そこ”をトントンと叩く。

振動が広がるたび、奥からぞくぞくと甘いしびれが込み上げてくる。

「だめえっ♡ また、またイっちゃうっ♡ 奥で、くるの、おっ♡」

「イっていい。中で、イッて。もっともっと、中から蕩けちまえ」

激しく——でも、やさしく。

ルシアンの指は絶妙な力加減で、快感だけを中に流し込むように動き続ける。

「イクッ♡ いくっ♡ 奥で、またイクのおっ♡ やっ、あああああっ♡♡♡」

腰が浮き、喉がひくつき、涙がこぼれる。

ぐちゃぐちゃにされた膣壁が、震えるほどの絶頂を迎え——それでも、ルシアンの指はやさしく、ねっとり動き続ける。

「すごいな……中、もう敏感になってる。……でも、まだだな」

ぐちゅっ、ぬちゅっ、ぐちゅんっ……！

ルシ안의指が、膣の奥を押し広げながら蠢くたび、内側の粘膜がとろとろにかき混ぜられていく。

「っあ……♡ やっ……♡ また、奥が……っ♡♡♡」

中がどんどん、彼の指を迎え入れるように熱くなっていく